

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 瀬尾 文子

キリスト教が世俗化という大きな変化を迎える中、19 世紀前半のドイツでは「オラトリオ」という音楽ジャンルが隆盛をきわめ、聖書などに題材をとった作品が音楽祭などで次々と演奏されるような状況が生じた。本論文は、この「オラトリオ」というジャンルについて、その位置取りが定められ、正当化が図られた過程を解明することで、この時期の宗教音楽に生じた大きな変化の一面を照らしだそうとした論文である。

本論は 4 章からなる。第 1 章では、この時期の音楽雑誌などでオラトリオ論が盛んにたたかわされ、このジャンルが教会音楽とオペラの間という位置に定位されてくる経緯が示される。第 2 章では、その過程でのオラトリオの台本をめぐる「リリック派」と「ドラマチック派」との論争や、聖なる存在が作品中で具象化されることの是非をめぐる議論、さらには教会的ではない宗教性の受け皿としての「崇高」という概念の流用の過程といった切り口を通して、そこでどのようなことが問題化され、どのようなロジックによってその正当化が図られたのかが、具体的な作品に即して描き出される。第 3 章でオラトリオ上演の主たる場となった音楽祭の実態が、ニーダーライン音楽祭を例に明らかにされた後、第 4 章では、この音楽祭を主要な活動の場としてオラトリオを制作した作曲家メンデルスゾーンの代表的オラトリオ作品《エリヤ》が取り上げられるが、そこまでの章で論じられてきたオラトリオというジャンルのあり方をめぐる経緯をふまえ、それに対する作曲家のひとつの応答としてみることで、この作品に対する新たな解釈が示される。

本論文の最大の特長は、一方で宗教音楽のあり方の根本に関わるきわめて理念的な問題を取り扱いながら、それが具体的な作品の制作過程の解明や作品分析などの実証的な研究とがっちり結びついているところに求められよう。オラトリオがキリスト教の世俗化を示すジャンルとして取り沙汰されることはあっても、その理念が音楽作りの個々の局面で相互作用を繰り返しながら形作られてくる過程を具体的に跡づけるような研究はこれまでほとんどなされてこなかった。本論は音楽研究の枠をこえ、この時期のキリスト教観の変化の具体的な展開を考える上でも示唆を与えるものになる。また、こうした大きな動きを視野にいられた研究によって、《エリヤ》をはじめとする個別の作品に新しい解釈がもたらされたのみならず、この時期の作曲家の活動を捉え直すための新たな視野を提供したことも高く評価されるべきであろう。

射程の大きな問題であるだけに、まだ十分に展開されていない部分や、議論の余地が残されているところなども散見されるが、この論によってもたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。